

第 36 期第 9 回研究会「録音構成の成立～戦時下の録音放送の意義」（メディア史研究部会企画）終わる

日時：2018 年 7 月 28 日（土）13：00～16：00

場所：関西大学東京センター（サピアタワー9階 教室1）

報告者：大森淳郎（日本放送協会）

司会：松山秀明（関西大学）

参加者：7 名

記録執筆者：松山秀明（関西大学）

今回の研究会では、戦時中のラジオの録音放送番組を聴きながら、政府の管掌下に生まれたラジオの「録音構成」という表現形式について討議した。

まず、報告者である大森淳郎氏（日本放送協会）から、戦時録音放送の歴史について解説があった。その歴史を簡単に振り返れば、日本放送協会が初めて独自の録音を放送のなかで使ったのは、1936 年 10 月 29 日、神戸港沖の観艦式の時であった。その後、1937 年に長崎放送局の技術職員であった齋藤基房が可搬型録音機を開発し、それをきっかけにして、録音機が戦場へ出かけるようになり、国民に「前線録音」を伝えるようになった。例えば、前線録音『徐州戦線より』（1938）、『武漢攻略戦』（1938）、『香港攻略戦』（1941）など、戦時下のラジオは戦闘の様子や兵士たちの労苦といった前線での録音を、銃後の国民に向けて放送し、戦意を煽ったのである。

研究会では、前線録音の一つである、日本放送協会広島中央放送局制作の特集番組『病院船』（1941 年 5 月放送）を参加者全員で聴いた。この番組は中国の戦場で傷ついた兵士を内地に送還する病院船に、制作者たちが同船して記録したものである。戦地で負傷した傷病兵たちを看護婦たちが手厚く看病し、内地に戻った兵士たちは再起奉公を誓う、という内容であった。この番組の全編を聴いてみると、国民の戦意を高揚させるために制作されたことは疑いようもない。しかし、ここで注目したいのはこの番組が可搬型録音機を用いることで、新しいラジオ表現に挑戦していたことである。つまり、録音した現実の断片を編集し、構成する「録音構成」を番組のなかに確認することができる。例えば、看護婦と傷病兵たちが船上で交わす何気ない会話のモンタージュは、非常に優れた表現であった。

以上をもとに、研究会で出された論点は 3 つである。第一に、これまで戦後の日本放送協会（NHK）は戦時下の放送をいかに総括してきたのかという点。終戦直後の『ラジオ年鑑』（1947 年度）の冒頭には「戦争中の放送に宣伝はあったが、正しい意味での報道は全く許されなかった」とあるように、戦後の放送史は戦時下の放送について記述する際、“当時は政府によって管掌されていたため、ラジオは戦争協力を行わざるを得なかった”という「仕方がなかった史観」で片づけてしまうことが多い。こうした記述からは、その背後にあった当時の制作者たちの葛藤が抜け落ちてしまっているのではないか。

第二に、これまでの戦時下のラジオに関する研究は、主に文書資料を中心に行われてきた限界をもっているという点。戦時下のラジオに関する研究では戦時中に日本放送協会が発行していたラジオ雑誌などを参照することが多く、「番組研究が不在」であり続けてきた。たしかに戦時下の番組は録音盤を塗りなおしたり、経年劣化、あるいは敗戦後の処理によって残されていない場合が多い。しかし、一部の番組は放送局以外にも保管されていることがあり、今後、戦時下の番組の発掘は急務である。

最後に第三に（これが本研究会にとって大きな意味をもつが）、戦時下の録音放送を研究することの可能性である。そもそも録音技術が開発されたとき、録音はニュースの間に補助的に差しこまれる「素材」に過ぎなかった。それがしだいに録音をつなぎ合わせることで新しい表現を生むと注目されはじめ、1942年頃に録音番組は「芸術的価値」として認識されるに至った。このように「録音構成」が戦時下にきわめて短期間で生まれ、芸術へと発展していった事実は、これまで終戦直後のラジオ番組（『街頭録音』『社会探訪』など）から録音構成が発生したとされていたラジオ史を塗りかえるものとなる。

研究会では、主に第三の点をめぐって活発な議論がされた。とりわけ当時の放送現場が政府の指導を内面化しつつ、いかにして新しい表現を生み出すようになったのか、戦時下の録音放送のもつ「両義性」について議論が集中した。『病院船』も当時頻発していた船中での傷病兵たちの自死について全く触れずに再起奉公を訴える内容であり、そうした当時のラジオ番組の危険性があった一方で、現場の録音チームがラジオの新しい表現を模索しようとする熱意も伝わり、こうした両義性は「善意がもたらした悪意」なのではないかというフロアからの意見もあった。以上の議論は「ドキュメンタリーとは何か」＝「現実はいかにして切り取られるのか」という本質論にまで発展し、その源流としての戦時下の録音放送を研究することの意義が改めて示される形となった。

当日は関東地方に台風が直撃し、開催自体も危ぶまれるなかで参加者は少なかったが、それゆえにこそ、濃密な議論ができた。今後は本研究会をきっかけとしながら、引き続き、戦時下のラジオ番組研究をさらに発展させ、カメラとマイクの歴史の再検証を行っていく必要がある。